

社会的養護施設の保育士養成のためのインターンシップに関する 実践報告

A Case of an Internship Program for Child Care Teacher Education

上 村 宏 樹
UEMURA, Kouju

キーワード：社会的養護施設、児童養護施設、保育士、専門性、インターンシップ

1. はじめに

これまで社会的養護施設において、保育士は児童指導員と共に日々の生活・自立を支援するなどの直接処遇職員として中心的な役割を担ってきた。今日において、虐待を受けた子どもが数多く入所する中、子どもの問題行動は深刻化し、求められる対応の幅は大きくなり、益々その役割は重要になってきている。

保育士資格を取得するための実習先として児童養護施設や乳児院等、社会的養護施設は、重要な役割を果たすよう求められている。今日、社会的養護施設についての調査で虐待を受けた子どもの割合が増加していることが示されており、例えば、厚生労働省（2015年）「社会的養護の現状について」によれば、児童養護施設では、虐待を受けた子どもの割合が53.4%となっており、現場では虐待を受けた子どものケアと対応に非常に苦慮している。また発達障害、愛着の問題、さらに家庭調整、地域との連携などの課題と相俟って、保育士等、直接処遇職員が求められる仕事の量・質は大幅に増加している。

そのように社会的養護の現場が複雑化かつ対応が多様化していく中で、保育士資格を取得し児童養護施設に就職する者は、不安を抱えたまま4月になると現場に向かわねばならない。現在の職員配置基準では、場合によっては1ヶ月もたたないうちに、複雑で深刻な課題を抱える子ども複数人を1人で担当しなければならないこともある。そうした中、厚生労働省（2011年）児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会等において、保育士の専門性をより求める声と共に、社会的養護施設などをめざす「養育福祉士」「施設保育士」といった別の養成過程も検討されてきた。いずれにしても専門性を確保するための研修や教育が必要となることは当然の流れといえる。また、保育士養成校の学生にとって保育士は、

保育所における保育士というイメージが圧倒的に多く、就職の第1希望は保育園、幼稚園と考えられ、大学入学時から施設への希望を持っている学生は少ない(宮崎他2008)。そのため大学のカリキュラムも保育園や幼稚園を中心に設定され、社会的養護の複雑かつ深刻なニーズに対応できるようになるための十分な時間が、大学のカリキュラムの中で確保できているとは言い難い。しかし、保育士養成校としては「養育福祉士」や「施設保育士」といった制度が成立するのを待つことはできないし、施設に就職していく目の前の学生を現実的に支えていかなければならない。学生を送り出す保育士養成校として、学生の不安をより和らげ、学生の中に少しでも現場に対応する専門的知識や技術を提供する機会を、保育実習の充実を図ると共に設けていくことが急務であると考えられる。

インターンシップ（以下、インターン）とは、「経済構造の変革と創造のための行動計画」（1997年5月16日閣議決定）において、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」として幅広く定義されている。社会的養護施設を目指す学生への専門知識や技術を提供する場として、またその様な人材を求める現場からの要請に応じて、こども教育宝仙大学では、児童養護施設におけるインターン制度を導入することにし、児童養護施設におけるインターンを2014年度よりスタートさせた。実際には、2013年度の1年間で施設と大学で試行しながら協議を続け、方法や契約等について検討し、2014年度において正式にインターンの協定書に両者が調印して開始された。本報告では、今後の社会的養護施設を目指す保育士の養成のあり方について役立てていけるよう、本インターンの内容を概観し、学生と児童養護施設職員にとつたアンケート、及びインタビューの結果をまとめていきたいと思う。

2. インターンの活動について

2013年の4月からおよそ1年間をかけて、インターンを引き受けていただいたA児童養護施設と協議を繰り返し、その方法と必要な資料・書類の作成を行ってきた。施設側からは、インターンを受ける学生（以下、インターン生）への要望・期待を施設でまとめていただき、また施設で活動するにあたっての注意事項や決まり事を出していただいた。施設側からインターン生に、本プログラムで実践してほしいこと、学んでほしいことについての要望・期待をまとめたのが以下のものである。

- ①仕事について：児童養護施設で仕事をとすることや、働くことについての責任・意味を知る。報告連絡相談を身につける。家事や食事、掃除などができるようにする。文章の書き方について。チームワーク（職員間）に気を配った動き方を学ぶ。
- ②自分について：自分で感じ、考え、疑問を持つ。わからなかったら聞く。子どもにとって何が大切かを考える。健康な体とタフなメンタルを養う。様々な人とかわり、考え方を知る。自分自身と向き合う。価値観を見つめなおす。施設で働くことの気持ちや覚悟を持つ。
- ③子どもについて：児童養護施設の子どもの理解する。実習では触れられない日常に触れる。長期的に子どもたちと関る。子どもとの距離のとり方を知る。
- ④職員について：職員の想いや視点を学ぶ。職員の声かけを良く観察する。実際に一緒に働いて意見や情報を共有する。

また作成した必要な書類は①インターン要項 ②守秘義務等誓約書 ③インターン・プログラムに関する協定書、である。

次にインターンのカリキュラムについてである。施設からの意見と大学の意見を刷り合わせ、より実践的、かつ現場に即した活動を行えることと、子どもにとっても有益であることを踏まえたプログラムを作ることになった。そのためには、

- ①学生が事前準備を十分に行い、必要な知識を獲得すること
- ②学生に自ら考えさせ実践を通して学べる場にあること
- ③段階を設けながらも現場職員に即した活動ができること
- ④教員及び施設職員が可能な限り学生の身近にいて相談・助言・指導の場があること
- ⑤子どもにとって意味のある活動でかつ楽しく参加できること

が必要であると考え、それを踏まえて内容を考えた。

インターンのプログラムに参加することは学生の任意であり、大学の授業とは別に行われる。インターンの活動の一連の流れは以下のとおりである。

- (1) 学習会（月1回 90分）
- (2) 事前準備会（月1回 概ね90分）
- (3) インターン活動A（月1回）
- (4) インターン活動B（回数は当該学生と施設で話し合っ

て決める）
学習会とは、社会的養護施設についての必要な知識や技術を得るための講義・演習であり、月1回1コマ分の時間を使って行う。座学あるいは、必要に応じてディスカッションやケース・スタディ、ロールプレイなど演習形式で行う。インターンは半年で1クールとなっている。1クールごとに学習会の内容は変わり、3クール目以降は、実際のかかわりや事例を用いたケース・スタディが中心となる。それぞれの学習会のテーマは以下のとおりである。

(第1クール) 目的：児童養護施設と児童養護施設の子どもの理解について理解する。

- ①オリエンテーション1：インターンとは インターンを行う上でのオリエンテーション（要項）
- ②オリエンテーション2：児童養護施設と子どもたちの理解——現状・法制度・施設組織
- ③児童養護施設での暮らし（施設が担当する）
- ④子どもに寄り添うことと権利擁護
- ⑤子どもの生活と自立支援
- ⑥児童虐待とその支援

(第2クール) 目的：児童養護施設の現状を把握し支援の方法を学ぶ。

- ①児童養護施設の子どもの現状の理解
- ②子どもの支援の実際——施設での養育
- ③職員の立場・支援法を知る（施設が担当）
- ④発達障害・愛着障害の理解と支援
- ⑤子どもの支援（演習）ロールプレイ① ファシリテーション～リーダーシップとフォロワーシップ
- ⑥子どもの支援（演習）ロールプレイ② 困難場面の対応

(第3クール以降) 目的：問題解決の方法を知り、支援を実践できる。

問題解決の発想と対応法を学び、ケース・スタディを行う。随時必要な知識とスキルを提供する。

これは学習の目安であるが、時と場合、状況に応じて変更することがある。また、問題が起こった時や今学ぶ必要があると思われる事項があった場合はそちらを優先するか、または学習会の回数を増やすなど柔軟に対応している。また、この学習会以外にも、児童養護施設で行われる職員研修に職員と一緒に参加できることになっている。

事前準備会とは、(3)のインターン活動A(以下、インターンAと略)についての準備を行う会である。基本的に第3土曜日に行われるインターンAに参加する前までに、1回あたりおおむね1コマ分の時間(90分)を費やすが、状況に応じて、2コマ、またはそれ以上の必要な時間を準備に充てる。準備の内容としては、a.プログラム内容の設定 b.担当者・役割分担の決定 c.準備物の購入・制作 d.プログラムの試行など、である。

インターンAとは、月1回児童養護施設の子どもたちと表現あそび・劇あそび活動を行うプログラムである。表現あそびや劇あそびを児童養護施設の子どもたちに実施する意味や意義は非常に重要であるが、本報告とは趣旨が異なるため省略する。この活動は施設のホールを借りて、学生がプログラムを作成し行う活動である。大学側の担当教員が同行し、活動を観察、必要な時には参加する。基本的に第3土曜日に行われるが、そのスケジュールと内容は次のとおりである。

10:00～：当日打ち合わせ及びリハーサル
 13:00～：幼児プログラム(90分)
 14:30～：小学生プログラム(90分)
 16:00～：片づけ
 16:30～：事後ミーティング 職員への報告
 18:00 解散

午前中に当日の打ち合わせとリハーサルを行う。終了後、昼食を済ませて、場のセッティングをする。13時に幼児の受け入れをし、14時30分までにプログラムを終了し、すぐに14時30分から小学生の受け入れをはじめ、終了後に片づけと掃除を行う。

片づけ等が終わり次第、その日の活動について、事後ミーティングで子どもの様子や関わりで気づいたことなどを話し合い、教員が適宜必要に応じて子どもの解説や助言、指導等を行う。終了後、職員と必要な情報交換を行い、挨拶をして施設を去り、解散する。

表現あそび・劇あそび活動とは、表現を伴ったり、表現が促進されたりするあそび、あるいは劇やお話をもと展開されるあそびのことである。インターンで重視しているのはどのようなあそびをするか、といったプログラムの内容以上に、実際にどのように関わるか、リーダー

シップやフォロワーシップをとっていくかということである。その関わり方について担当教員が事後ミーティングにおいて助言をしたり必要な情報を提供したりする。

表現あそび・劇あそびプログラムの流れ(幼児・小学生共通)の流れは次の通りである。

子ども入室 名札作成・名札を付ける
 00:00 円になって自己紹介・他己紹介
 アイスブレイク
 00:15 表現あそび・劇あそび活動
 01:00 自由あそび
 01:20 振り返り
 01:30 終了

インターン活動B(以下、インターンBと略)は、第1クールを終え、本人がインターンBに進む意思を示し、施設と大学で協議の結果、適切であると判断されれば参加することができる。これは実際に施設の生活の中に入り、生活の支援を行う活動である。最初に複数のユニットに入ってから、自分の担当ユニットを決め、そこから定期的に担当ユニットに入る。その頻度は、学生と担当ユニットの職員等と話し合うことになっている。また期間自体も話し合いで決めるが、目安としては概ね3ヶ月～6ヶ月を想定している。希望によってさらに長期になる場合もある。

インターンA、インターンBへの参加条件のまとめは次の通りである。インターンAの条件:学習会の①②(オリエンテーション)を受けること。全回参加と年度末までの活動に同意すること。インターンBの条件:1クール終了していること。本人が選択すること。施設と大学が適切であると認めること。まだ学習や準備が不十分であると判断された場合は、先のインターン活動の一連の流れで示した(1)(2)(3)の活動を必要と思われる期間続けていく。

学生の教育・支援体制は次のとおりである。①第1クール6回の学習会で社会的養護の現場に入る必要な知識をより現場に即した形で伝える。②準備会及びインターンAには担当教員が参加し、プログラム活動の様子を見て、基本的には見守る姿勢であるが、必要であれば介入し、その場で助言や指導を行う。③都合がつけば児童養護施設の職員がはいり、コメントや助言をする。プログラム活動後には事後ミーティングを行い、子ども1人ひとりについて、学生から子どもの様子や気づいたこと、また関わりでうまくいったことや困難に感じたことなどを報告してもらう。それについて担当教員がコメントし、必要な助言と情報提供を行う。学生はそれを記録に残す。④担当教員が児童養護施設と定期的に打ち合わせ、情報

共有、意見交換を行う。⑤インターンBは、現場の担当ユニットの職員や、施設のインターンを担当している職員から指導を受ける。大学の担当教員も個別に話を聞いたり、本人からの相談を受け付けるなどしたりして相談・助言を行う。

3. インターンの実施人数とアンケート及びインタビューの結果

インターン生のアンケート(a)とインタビュー(b)、インターンを終了し施設に卒業した者のインタビュー(c)、インターンに関した職員のアンケート(d)をとり、それらをまとめた。時期、対象、方法等は次の通りである。

(a) インターン生へのアンケート実施

時期：インターンの各クール終了後
 対象：インターンを修了した学生全員
 方法：無記名記述式アンケート

(b) インターン生へのインタビュー

日時：2015年11月11日
 対象：2015年11月現在でインターンA・Bに参加していた学生8名
 方法：グループ・インタビュー

(c) インターン修了生(卒業生)へのインタビュー

時期：2015年10月～11月
 対象：インターンを終了し施設に就職した者2名
 方法：個別インタビュー
 時間：各々約60分

(d) 施設職員へのアンケートの実施

時期：2015年9月
 対象：インターンに関わった施設職員4名
 方法：無記名記述式アンケート

インターンの実施人数と(a)アンケートについてのまとめは次の通りである。

以下は記述式設問のまとめである。

表1 インターン受講期間と対象学年・人数

	3年生	4年生	合計	インターン生総計
2014年4月～9月	8名	3名	11名	33名
2014年10月～3月	11名	3名	14名	
2015年4月～9月	3名	5名	8名	

表2 〈設問1〉プログラムについての満足度 (単位・人数)

満足度	満足だった	やや満足だった	どちらともいえない	あまり満足できなかった	満足できなかった
2014年後期	3	4	0	0	0
2015年前期	7	4	3	0	1
合計	10	8	3	0	1

表3 〈設問2〉プログラムは自分のキャリアに役立つと思うか? (単位・人数)

キャリアに役立つと思うか	そうだ	どちらかといえばそうだ	どちらかというそうではない	そうではない
2014年後期	6	1	0	0
2015年前期	14	3	0	0
合計	20	4	0	0

表4 〈設問3〉プログラムに積極的になれたか? (単位・人数)

積極的になれたか	なれた	どちらかといえばなれた	どちらかというとなれなかった	なれなかった
2014年後期	3	2	2	0
2015年前期	6	1	8	0
合計	9	3	10	0

〈設問4〉プログラムでよかったところ、よかった活動

- ・みんなで協力してやれたこと、支えあえたこと。
- ・子どもたちとの活動の内容がよかったこと。——表現あそびや劇あそび、アイスブレイク
- ・授業や実習で知らない子どもの姿を知れたこと。
- ・自分たちで考え、実践し、振り返りを行ったこと。それを次につなげられたこと。
- ・実際に子どもたちの背景を聞いたこと、背景から来る行動が知れたこと。 など

〈設問5〉プログラムでよくなかったところ、よくなかった活動

- ・子どもへの配慮や注意、危険予測が不十分であったこと。
- ・プログラム内容の吟味や準備が不十分であったこと。
- ・学生同士の連携がうまくいかないことがあったこと。
- ・各あそびの時間配分や子どもへの指示等がうまくいかなかったこと。
- ・話し合いや準備の時間が不十分であったこと。 など

〈設問6〉自分のキャリアに役立つと思った理由（それぞれ興味深いためそのまま載せている。原文儘のため語調等は不統一）

実際に児童養護施設の子どもたちと関ることで、どう関ればいいのか、言葉遣いなどを考えることができました／実際に先輩たちを見て学べたこと／施設で育つ子どもたちが楽しい、嫌だ、面倒くさいなど言いたいことが言え、そのストレスを発散できる場所で実際に学ぶことができたこと／1人ひとりの子ども達の性格が違う中、どのような方法であそびやゲームを進めていくのかを考えると／関ろうとするとはじめは拒否されたり、冷たくされたりしたが、精神面で強くなったと思う／子どもの行動についての考察などを経験していたので、他の施設でボランティアをしているときも子どもの行動について考えられるようになった／子ども達の行動から、その日の気持ちや、背景について振り返り学びにつなげられたこと／毎月長期間行くと関係が築けて色々なアプローチを行うことができた／子どもとかかわることで将来の決め手となった／実際に就職の面接のときにキャリアとして、インターンのことを伝え、良い評価があったから／施設から声をかけていただいてアルバイトや就職につながった／後輩につなげていきたいので、どんどん参加してファシリテーターなどを積極的にやってほしい など

(b) インターン生へのインタビューについてのまとめは以下の通りである。

〈インターンA〉

- ・長期的に継続することで実習では見られなかった子どもの様々な姿、変化や成長、発達が見られた。
- ・複数ではいることで、チームワークができ、リーダーシップやフォロワーシップが身についた。
- ・状況に応じて臨機応変に対応する力がついた。
- ・良い意味で失敗を恐れずに思い切って試すことができたし、失敗から学ぶことも多かった。
(事前の準備で失敗はないようにするが、大きな失敗が起こりそうな場合は教員が介入した)
- ・各自が責任感と意識を持たなければならなかった。
- ・実習では子どもたちが待ち構えてガードされている感じで、インターンは子どもたちがこちらのプログラムに来てくれる感じがした。
- ・子どもたちから拒否されたり、言うことを聞いてくれなかったりして、そういう子どもたちとどう関るかを実践できて凄く学びになった。
- ・いろんな特徴を持った子どもがいて、予想外のことがいくつも起こり柔軟性が身についた。
- ・毎回プログラム終了後にミーティングがあって、その場で相談できたり子どもの行動の解説がされたりしたのがよかった。
- ・子どもたちについて説明されると、子どもたちの具体的な背景が見えてきて関り方がわかってきた。
- ・否定的に関ってくる子どもと接する中で心が強くなって、どんな子ども来ても大丈夫じゃないか、と思えるようになった。
- ・専門知識や技術を実際に即して学ぶことができた。

〈インターンB〉

- ・実習ともインターンAとも違い、生活に長期に入るとなると、さらにそれまで見えなかった姿が見えてきた。例えば、実際に暴言をはかれたり、一緒にやっていた宿題のプリントをぐちゃぐちゃにされたり、物に当たられたりしたときは驚いた。
- ・ある1人の子に長く付き合っていくことで関係もでき、その子の変化を感じることができた。それでも職員とも全然子どもたちの対応がちがった。
- ・発達も全く子どもによって違った。子どもたちのそれまでの背景や様子を見て、いかに乳幼児期の発達が大切なのか、養育が大切なかがわかった。
- ・声のかけ方、子どもの好きなことを職員は良く知っていて、工夫の仕方、話し合いのしかたなどとても勉強になった。
- ・子どもを見ながら家事をして、次の予定を考えてと、そのすごさが本当にわかった。子どもが反発しないような声のかけ方を学んだ。それでもインターン生が言

っても聞いてくれないことが多かった。当たり前だけどやはり職員とは違う事を実感した。

- ・課題として中高生にはやはり口を出すことはあまりできなかった。
- ・自分はインターン生で、子どもも言うことは聞いてくれないので、自分の立ち位置や役割がわからなくなることがあった。

(c)インターン修了生(卒業生)へのインタビューの主な意見やまとめは以下の通りである。

- ・インターンをやっていると、子どものことがあらかじめわかって入りやすかった。児童養護施設の研修会で、インターンで前もって経験していたので、こういうことなのだとなんと腑に落ちることがあった。
- ・1日の流れ、1年の流れを前もって経験していたので就職してからある程度予測がついて行動でき、見立てることができた。
- ・同じトラブルを起こしても、インターンのときに経験していたのと、そうでないのは全然違うと思う。
- ・現場では子どもたちから様々な洗礼を受ける。実際に就職しないとわからないけど、前もってインターンなどで子どもたちの態度が少しでもわかっていれば予測が立って変わってくると思う。
- ・子どもたちとなるべくたくさん関って、現場の先生がいう「生きた教材」から学ぶ機会があると良い。実習では子どもはなかなか出してくれないし、関係ができてないので、実習生が子どもに言うこともできないため経験としてはあまりできないことがある。
- ・現場に入ってから困ったこと、どうして良いかわからないことがたくさん出てくるので、卒業してからも、気軽に大学の先生のところに来て尋ねられたり、話ができたりする環境があると良いと思う。
- ・インターンでは、この子はこうかもしれないあかかもしれない、と考えて関わり、その上で先生や職員の解説があったので、いろんなことがわかって楽しかった。
- ・インターンでは考えてみて、実際にやってみて、振り返って、解説や相談があって、という流れがあり、その流れが今でも役に立っている。
- ・インターンでやっていることは児童養護施設に就職する学生でなくても、子どもと関る上で大切なことが学べると思う。
- ・実習だと期間が短いので、失敗はそのまま失敗になりがちだが、インターンだと次があるので失敗しても、次どうしようという話し合いができた。立ち止まらずにやってみて、次こうしてみようとか、今度はうまくいった、ということになって、とても大事な経験だったと思う。

- ・実際に子どもたちに満足の行くプログラムにするには、もっと準備したり、計画的に動いたりしていくことが必要だと思う。
- ・就職して最初凄く辛かったときに、卒業生としてインターンに参加させてもらったが、その時に私インターンのときに凄く笑っていたのに今仕事で笑えていない、こんなつもりじゃない、ということに気づいて自分を振り返ることができた。そういう戻ってこられる場所が卒業してからもあってほしいと思う。

児童養護施設職員のアンケート(d)のまとめは、以下の通りである。

〈学生たちについて〉

- ・一生懸命取り組んでいる。
- ・回数を重ねていく事で、学生自身に自信がでてきた。顔つきや表情も良くなった。
- ・子どもたちと関係が取れたり、注意ができたりするようになるのがよかった。
- ・ユニットに入っている学生には一定の仕事は安心して任せられるようになった。

〈子どもたちについて〉

- ・インターンで活動したことを、子どもたちが楽しそうにユニットで見せてくれたりした。
- ・子どもたちも指示や声を聞きながら動けるようになった印象を持った。
- ・インターンのあそびがその後のあそびにもつながりやすかった。
- ・子どもたちも活動を楽しみにしておりユニット内でも話題になった。

〈課題〉

- ・活動の意識が不明確だと感じるがあった。各回の目標をもっと明確にするとよい。
- ・専門的な話やさらに学びを活かすために、もっと職員と学生のコミュニケーションの時間が取れるとよい。
- ・せっかくの機会なので、仕事のよさや魅力を伝え、就職につなげられるようにしたい。

〈その他〉

- ・プログラムでは想像以上に子どもたちが活動に集中しており、また高い応答能力を持っていることに気付かされることがしばしばあった。アプローチの仕方子ども出し方が変わることを再認させられた。
- ・実習ではグループワークを経験する機会あまり持たないので、児童養護の集団と関る練習には良かったと感じる。
- ・指導者が学生の近くにいる事が、OJT的に学生にとっては良いと感じる。

4. まとめ

1年の準備期間と、1年半の実施期間を経て、ようやくインターンのプログラムとして形ができてきた。準備から実施、振り返り、そして次につながる流れを長期的に行うこと、またユニット担当となり生活現場に入って実践することの有用性は実感できた。また、学生も回を重ねる毎にチームワークがよくなり、子どもへのかかわり方が徐々に変化していったと思う。実際の就職としては、2014年度の卒業生について、参加者3名のうち2名は児童養護施設へ、1名は障害者施設への就職が決まった。

インターン生へのアンケートやインタビュー、卒業した者へのインタビューから、長期的に関ることの利点や、施設職員や教員がその場について助言・指導を行うことによる学び、自分たちで考え、実行し、振り返って次につなげるという流れを実践することによる学びなど、様々な学びがあることが読み取れる。施設職員のアンケートについても、まとめであるので重複を避けているが、取組の一生懸命さや、学生の自信や顔つきの変化を評価する回答が多かった。インターンに参加して実際に児童養護施設の職員となった元学生からも、インターンで学んだことが実際に現場で役立っていることが伺える。

学生が社会的養護施設に就職するまでの施設経験を考えると、実習を含め、通常、在学期間内で施設の子どものたちと関わる機会は多くはない。しかし、社会的養護施設で必要とされる専門性は、子どもと関係を構築した上で学べることや、長期的な変化の中で学べるものがほとんどである。児童養護施設等の実習担当からよく聞かれる声は、ようやく慣れてきたところで実習が終わる、ということや、短い時間ではやれることが少ない、ということであった。特に喪失体験や、人間関係に課題を抱える子どもが多く入所している社会的養護施設では、子どもは長期的な関係の見通しがないと安心して関われないし、そのため、施設生活のありのままに近い形で問題行動を出してくる場面に出会う機会もほとんどない。従って子どもたちの成長や変化を見ることや、そこから実際に学ぶことが困難なのである。もちろん、ただ長期的に関わればよいというものでもないし、インターンであれ、当然子どもが出せる表現は限られる。しかし長期的に、子どもの様々な背景を理解しつつ関わり、子どもたちが自分を表現できる空間で困難や問題に出会い、その子に対応法を考え実践していく場は、特に社会的養護施設に就職を希望する学生には必要であると思われる。また実際にユニット担当となり、現場に入ることは、さらに本来の姿に近い子どもたちとの出会いや、それに伴う困難や葛藤を実際に体験する機会となり、職員として現場に入る前に実践的な知識と技術が身につくことにつながる

だろう。また、職に就いたときの見通しも立てやすくなる。もちろん、ここで述べていることは実習の有益性の何れも損なうものではなく、より社会的養護の専門性を求めるときには、実習とインターンの特長と課題を補い合うことが必要だと思われる。

このインターンの学生参加は任意であり、大学の授業とは別に行われるため単位になることはない。そのためより主体的な学生の割合も相対的に多く、定期的活動以外でも準備や学びのために集まったり、活動や話し合いの場でも積極的な姿が見られたりした。通常の授業であれば、授業の期間が終われば終了であるため、通常半年、長くても1年で終了であるが、インターンについては1年以上続ける学生も少なくない。そのため学年の違いを越えて交流が行われ、上の学年と共に活動したことから学ぶことや、下の学年に伝える上で学ぶことなどもあり、学生にとっては良い機会であると思われる。

一方で、課題もたくさん残されている。まず学生にとっては単位になるほうが喜ばしいとの意見もある。また授業ではないので時間や教室の確保などにも苦労することがある。

また、話し合いの時間や準備の時間が十分取れないこともあった。施設職員から指摘されているように、意識を持ち目的を明確にしないと、長い期間の中で学生が何のために入っているのか見失うことがある。学生の責任感とモチベーションの維持をどのようにやっていくかが大きな課題の1つである。

またインターンがカリキュラムとしてではなく学生の任意で行われる場合、インターン生にとってのメリットをどのように伝えるのか、どのように学生を募集するかについても検討が必要である。さらに、就職をした学生のインタビューの最後にあったように、就職した後の学生の支援体制も重要であり、かつ課題であると思われる。インターンではOB・OG会を作り、緩やかにつながって、相談を受けたり会って話したりして、それを補っている。それらをしっかりとシステムとして作り、安心して戻れる場、現場の学びを後輩に伝えていく場を提供することが重要であると思われる。

現場の職員に対しては施設の業務以外にかなりの負担を強いることになり、時間的にも体力的にも十分な時間を確保することが難しい。教員としての反省点は、十分に従事できない時期もあり、学生の相談や指導の時間が十分に確保できないこともあったことである。しっかりと学生のキャリアにつながるよう取り組んでいくためには、それだけ学生の教育に専心する施設職員、及び大学教員の確保も必要である。

今回、インターンを1年半実施してまだまだ課題もあるものの、このインターンが、専門性を身につけること

の基盤となる可能性を感じられた。こうした動きが、学生の社会的養護への関心を高め、現場のさらなる学びへとつながり、施設を目指す学生のカリキュラムの改善につながればと思う。

参考文献

- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局長付け (2003年)「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」(1部改正 雇児発0808 第2号 平成25年8月8日改正) (2015年10月28日閲覧)
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/dl/tokurei3-2.pdf
- ・厚生労働省 (2015年)「社会的養護の現状について」(2015年10月28日閲覧)
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000100660.pdf>
- ・佐伯知子 (2008)「施設実習における学生の『学び』—実習感想文より—」大阪総合保育大学紀要